

『奇跡のバランス』

著：坂井朱生

ill：旭炬

拾い癖があると華子言っていたけれど、動物を連れてくるのも克貴をこうして面倒みてくれているのも、もしかしたら寂しかったからなのかなあ、と思えてしまう。

「あの、さ。菱川さん、寂しかったりはしない……の？」

訊きづらくて、つかえつかえになってしまう克貴に、菱川はぽんと頭に手を置いた。

「もう慣れたかな。自分が言いだしたことだし、いつかは独立するもんだろ？」

「でも」

「気にしてくれてありがとう。まあ、ときどき一人が寂しくなることもあるよ。で、つい動物とか拾ってきちゃうんだが、そのたびに華子にどやされる」

言って、彼は肩を竦めた。

「どうして？」

「世話ができないんだ。不規則な生活だし、忙しくなってくると何日も家を空けたりもするからね。仕事にかかりきりになると、どうしても面倒が見られないから、可哀相だろう？ で、いっつもあいつに誰かひきとり手を探してもらう羽目になる」

「誰か、恋人—とか」

「それもなかなかね。時間があわなかったりすれ違いが増えると上手いかないだろう？」

なんでもなさそうに言っているけれど、菱川の横顔はかすかに曇っている。

過去の恋人を、思いだしているのだろうか。

やっぱり、寂しそうだ。

上手くは言えないが、どこことなく、孤独の気配がする。

「ああ、口説いている最中に言うことじゃないか」

静まった気配を嫌ったのか、菱川はわざと明るく声をあげる。

そういう相手じゃ嫌か？ と訊かれ、克貴は返事に困った。

今までつきあったのは同年代の女の子ばかりで、すれ違う相手なんて知らないから、答えようがない。

「そんな困った顔しなくていいよ」

「……うん」

一分、一時間、一日。時間を追うごとに、菱川に馴染んでいる自分がある。話す言葉さえ違ってきているし、当初より距離も近くなったようだ。

「さて、と。薬飲んだら寝る時間だね」

「まだ平気だよ」

「駄目だって」

「だって、退屈だし、もう少し話していたいんだけど、駄目かな」

彼が戻ってきてから、まだたいした時間が経っていない。明日も一日中でかけてしまうから、またろくに話もできなくなるのに。

好きかと問われれば困るくせに、離れるのは嫌だ—と思ったのが表情に表れてしまつたらしい。菱川がしかたないなあ、と言いたげに眉を跳ねあげた。

「そんなことを言ってくれと、俺も誤解したくなるね」

「誤解って、なんだよ」

菱川が、克貴の座る椅子の横に立つ。どうしたのかと首を傾げたのを腕をひかれ、立たされた。

「菱川さん？」

はじめて見るような、厳しい表情。彼の指が不意に顎にかかる。

「！ —っ…ん……」

傾けられた顔が近づき、唇が重なる。腰を抱かれひき寄せられ、ぴったりと身体が重なった。

びっくりして、動けなかった。

「……ふっ、んん……っ」

呆然とするうち口づけは深くなる。ようやく我に返って緩くもがいても、その程度では菱川の腕が離れない。

目眩(めまい)がする。唇を噛まれ、呼吸すら奪おうとするかのような強く、貪るようなそれは、克貴が経験したような淡いものとはとても同じ『キス』なんて言葉では表せない。

舌が絡み、怯(おび)えて隠れようとする克貴のそれが追われ、捉えられる。ざらりとした感触でなめられ、背筋がびくと震えた。

(気持ち、いい)

彼の唇に酔わされて、頭の中がぼうっとなってしまう。

がくんと膝が頹れそうになり、彼の腕の中で克貴は力を失う。しなだれかかるような恰好で、気づけば夢中で彼に応えていた。

ようやく、彼の唇が音をたてて離れていった。

「あ—」

「こういうコト。油断しちゃ駄目だよ。言っただろう、俺は君を口説いてるんだって」

キス、されたんだ。

まだ実感がわからない。掠めとられた唇を、克貴は自分の指でなぞっていた。

「あんまり可愛いこと言われると、なけなしの理性が崩壊しそうだからね。おやすみ」

菱川が、動けないままの克貴の背中をとんと押した。

数歩よろければ「大丈夫？」と慌てた声がかかる。平気ですとうつろに答えたまま、克貴はふらふらと寝室へ向かった。

条件反射のようにベッドに横になるが、目を瞑っても睡魔は訪れない。

(……キス……)

ぐるぐると、その単語ばかりが頭を巡る。顎にかかる長い指の感触や、重なる瞬間の彼の強い瞳の光だとか。

そんなものが何度もくり返し、瞼の裏に浮かんでは消えていった。

嫌、じゃなかった。

菱川のキスがどういう意味を持つのか、わからないわけじゃない。本気だというのは、触れた感触から充分すぎるほど伝わってきていた。

(どう、しよう)

自分の指で唇を撫でる。
離れていく瞬間、思わずひき留めようとした自分がわからなくて一わかりたくなくて、克貴は固く目を瞑った。

* * *

締切ぎりぎりまでひきずった菱川への罰は、三日間、仕事場にこもりきりの刑。
克貴の様子を確認したくて電話をしようにも、横では煩いマネージャーが見張っていてどうにもならない。

実務が苦手な菱川のために、学生時代からの友人を頼り、作業以外のすべてを彼に任せている。おかげで頭があがらないのだ。

ようやく事情を話し、華子に電話をして代理を頼むことだけは許されたのだが、それ以外は食事すらままならないほどだ。机を離れられたのはトイレとシャワーのときだけという状態だった。

最後の一日は完徹で、仕事があがったとたん、菱川は倒れるようにその場で眠りこんでしまっていた。

克貴の様子はどうかだろうか。

目が覚めると真っ先に考えたのはそのことで、菱川はとるものもとりにあえず家へと向かった。

三日間も放っておいてしまったのだ。それも、キスをしかけてそれきり。

考えてみたら、ひどい話だ。せめてフォローぐらいすればよかったのだが、真夜中にかかってきた悲鳴めいたマネージャーからの電話で、容赦なく仕事場へと強制連行されてしまったのだった。

本当は、毎日帰ってもいいような状況ではなかった。それを強引に戻っていたのだが、やはり進行がかなり危なくなっていて、菱川としてもこれ以上は無理を言えなかった。

キスをしたとき、克貴は相当驚いていたようで、言葉さえ失っていたが、恐れていたような嫌悪した様子はなかった—と思う。

はっきりと恋愛を自覚してとはわからないが、少なくとも克貴は自分を嫌がってはいないようで、まだ、望みはありそうだ。

せめて、今晚は美味い夕飯でもつくって、ゆっくり話しあいたい。

そろそろ体調もよくなっただろうし、まだすぐにいい返事はもらえないだろうが、彼が家に戻るまでのあいだにせめて、今後も連絡がとれるような状態にしておきたかった。

久しぶりに恋愛に浮かれている、そんな自分を自覚して、菱川は自分が可笑しかった。

ずいぶんと歳の離れた子が相手だというのに、—それも、知りあったばかりの少年に、すっかり夢中になっているらしい。

それでも、誰か好きな相手がいるというだけで毎日にはりあいがあるし、なにより仕事か捗(はかど)るようだ。今回も仕事場に閉じこめられているあいだ、少しでも早く仕上げたいと思っていたせいか、常になく空恐ろしいばかりの集中力があつた。横で見ていたマネージャーも『どうしてそれが普段からできないんですかねえ』と呆れていたほどだ。

夕食の材料を買いこんだ菱川は、両手いっぱいの荷物を抱えて自室のドアを開けた。

「ただいま。放っておいてごめん」

荷物を置き、靴を脱ぐが、どうも家の様子が妙だ。人の気配がまったくない。

「華子……？ 克貴くん……？」

呼んでみるが、応えもなく。

なにかあったのだろうか。まさかとは思うが、自分が留守のあいだに容態が急変した、だとか。

寝室も、他の部屋もくまなく探すが、やはり誰もいない。ドアはきちんと施錠されていたから、少なくとも合鍵を持つ華子が、一度は訪ねているはずだ。

急いでリビングに戻ると、テーブルの上にメモが一枚置かれている。

慌てたような文字で、たった一行。

「……どういことだ……？」

コップを重石にしてあったそれをひき抜き目をとおした菱川は、手の中でメモをくしゃりと握りつぶしていた。

本文 p88～96 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>